

トマス福音書によるイエスの宗教

土屋好重

一、トマス福音書の特徴

一九四五年エジプトのナグ・ハマディにおいてコプト語で書かれたキリスト教グノーシス派のものと思われる古文書が発見された。これは現代の伝統的な制度体的教会の教義とは全く異なった思想に立つものである。すなわちパテロ・パウロを中心とする神の審判の思想を主軸とするものでなく、早くから制度体的教会から異端とせられて来たものである。その典型的なナグ・ハマディ文書の一つは、ユタ・トマスによって書かれた「トマス福音書」(The Gospel of Thomas)であると言えよう。

英文によって訳出せられたトマス福音書としては先ず Gullautmont, Puech, Quispel, Till and Al Masih: The Gospel According to Thomas 1976 を挙げる事が出来る。また最近出版のもの

© by James M. Robinson, general editor: The NAG HAMMADI LIBRARY 1981 中に収録されている The Gospel of Thomas を掲げることが出来る。このトマス福音書の英訳は、Thomas O. Lambdin によって行なわれているものである。先進の翻訳者の後を追っているものであり、古文書の不明な文字なども殆んど完全に近いまでに判読しているものなので、小生はこのラムブディ氏の英文を今回の研究の基礎資料とすることにした。これから引き続き引用するトマス福音書中の各訓言はラムブディ氏の原書を小生が和訳したものである。我が国におけるトマス福音書の文献には次のようなものがある。『聖書の世界5新約1』(講談社一九七〇年)に収められている、荒井 献先生訳「トマスによる福音書」。ブルース著、川島貞雄先生訳『イエスについての聖書外資料』(教文館 一九八一年)の中にある「第七章トマス福音

書』ナグ・ハマディ文書の全般に関するものには、ペイゲルス著 荒井 献先生・湯本和子氏訳『ナグ・ハマディ写本』（白水社 一九八二年）がある。

トマス福音書においてユダとトマスによって、イエスの思想として語られている宗教思想の内容は、どのようなものであろうか。ここにその特長の主要な点を簡条書き式に紹介することにしよう。

イ、イエスとトマスは精神的な双子であった。

トマス福音書の訓言序に次のように綴られている。「これらの訓言は生けるイエスが語り、双子のユダ・トマスが書き記した秘密の言葉である。⁽¹⁾ユダとはイスカリオデのユダでないもう一人のユダのようである。トマスとは言うまでもなくナザレのイエスの使徒である。このユダとトマスは肉体的な双子ではなかったようである。二人はグノーシス主義的な精神的な兄弟であるものと考えていたのであろう。トマスはイエスとも兄弟であると信じていたようである。そこで新約外典のトマス行伝として知られる文書には次のように記されている。「キリストの双児、いと高きもの使徒、キリストの隠された言葉への参与者……あなたは……多くの人々に自由をもたらしました。」⁽²⁾このことはトマス福音書中の次の訓言の中にも述べられているのである。訓言一〇八。イエスは言った。「私の口から飲むものは、私のようになるであらう。私自身が彼になるであらう。そして隠されたものが彼に現われることであらう。」⁽³⁾

「生けるイエス」の生ける (Living) がどのような意味のものであるかを検討する必要がある。キリスト教正典とされている共観福音書には「生」とか「死」とかの用語が特別な意味を持つものとして使用せられている。すなわちルカ伝には「死人たちに彼等の中の死人たちを葬らせなさい」とある。またマタイ伝にも「わたしについて来なさい。死人たちに彼等の中の死人たちを葬らせなさい。」⁽⁴⁾とある。同じ死人の用語を使っても前者と後者とはその意義が全く違っているのである。一方は精神的に死んだものの意味を持つのである。そして他方は肉体的に死んだものを意味するのである。このような考え方は生けるものについても同様に見られることになる。すなわち一つには精神的な生が意味され他の一つには肉体的な生が意味される。イエスが究極的に求めた生は肉体的なものではない。イエスが本当に求めた生は精神的な生である。そこでイエスにとっては精神的に死ぬことが好ましくないのである。そして精神的に生きることが望まれるのである。生き甲斐の無いことが拒否され、生き甲斐の有ることが肯定せられるのである。トマス福音書においても共観福音書の考え方が引継がれていることになる。死を恐れるとは精神的な死を恐れることであって、肉体的な死を必ずしも恐れることではない。生けるイエスとは蓋し「生き甲斐を持つ」イエスであると解釈して好いのはあるまいか。

口、御国は心の内にあると考えることが一義的に必要とされる。

ペテロ・パウロを基盤とするカトリックやプロテスタントのよ
うな制度体的キリスト教においては、神の審判とくに世の終りの
審判が、絶対的な究極的な信仰箇条とされる。もちろん心の天国
を全然説かないのではない。例外的な例と見て差支えないであろ
うが、ルカ伝には次の語が記されている。「神の国はあなた方の
ただ中にあるのです。」ユダヤトマスは天国や御国を否定するも
のではない。しかし心中の御国は積極的に説くが、心の外の御国
は消極的にしか取扱わないのである。トマス福音書の次の訓言は、
心の御国が如何に重要な一義的な意味を持つものであるかを強調
しようとしているものと理解されるであろう。訓言三。イエスは
言った。「もしもあなた方を導く人たちが、あなた方に対して、
見よ御国は空にあると言うならば、それなら空の鳥があなた方に
先んずることであろう。もしも彼等があなた方に対して、御国は
海にあると言うならば、それなら魚の方があなたに先んずること
であろう。むしろ、御国はあなたの内部にあるのである。そこで
御国はあなたの外部にもあることとなる。もしもあなたが自分自
身を知るに至るならば、その時あなたは知られることになるであ
らう。」

ハ、自分自身が持っているものが自分を救済する。

自分自身の中核を成すものは霊とか靈性とか呼ばれるものであ
る。それは精神的な生を求め生き甲斐を要請する心である。それ
はギリシャ語でプネウマと呼ばれている。プネウマ・アキオンと

続けて、聖霊と言う語も作られる。しかしながらプネウマだけで
も、聖霊の意味で使用せられる。この靈性や聖霊の働きは自己の
救済者であると理解せられている。そこでトマス福音書は左記の
ような訓言を記している。訓言七〇。イエスは言った。「あなた
が持っているものをあなた自身の中から取り出す (bring forth)
ならば、あなたが持っているものが、あなたを救済するであろう。
あなたが持っていないものを、あなたの中にあなたが持ち合わせ
ていないならば、持っていないものが、あなたを殺害するであら
う。」⁽⁸⁾ 自分の中の自分自身は霊であり聖霊である。自分自身の中
の生ける霊を自分の外にまで展開させる時、自分は救済され、世
も救済に向かうであろう。自分自身の中の聖霊を働かさぬならば
自分が救済されず、反対に殺されてしまうのである。

二、自分の場所を始めるに置くものが幸福になる。

自分自身の靈性が自分の中核であり基礎である。一切のことが
靈性を最初に置いてなされるのでなければならぬ。トマス福音
書はそれを次のように記している。訓言一八。弟子たちがイエス
に言った。「我われの終りがどんなものであるかを教えなさい。」
イエスは言った。「あなたが終りを追求しているのは、いわば、
あなたが始めを見出したためなのであるか。何となれば、始め
がある所に終りがあるであろうからである。自分の場所を始めに
置くものは幸福である。彼は終りを知るであろう。そして死を経
験しないであろう。」⁽⁹⁾ 終りとはエンドであって目的でもある。霊

性の目的はユダ・トマスの立場からは安息 (Repose) とされている。具体的にその訓言を探すと左記のものを見出すことが出来るであろう。訓言六〇。イエスは彼等に言った。「小羊が生きている間は、彼は食わないであろう。ただし彼が小羊を殺し、小羊が死体となるならば食うのである。」彼等はイエスに言った。「彼にはそうする以外に道がないのである。」イエスは彼等に言った。「あなた方も同様に、死体になりそして食われることがないように、安息の中に、自分自身のための場所を見出すようにしなさい。」ユダとトマスは、精神的にも肉体的にも死を避けようとしているのである。そしてたとえ肉体的に生き続けられなくとも、精神的には生き甲斐のある生を持ち続けようとする願っているのである。

二、ユダ・トマスによる宗教の思想体系

トマス福音書の著者たちは左の如く記している。訓言一。そして彼は言ったのである。「これらの言葉の解釈を見出すものは、誰であつても、死を経験しないであろう。」ユダ・トマスによるイエスの宗教思想は深い哲学を基礎とするものである。そこで深く自己自身の反省を積んだ人でないと、その真意が理解されないものとなっている。私は既に一応のトマス福音書の思想内容の紹介を行なったが、それは更に掘り下げられなければならない。そして秩序立てられ体系化された思想体系に、解釈され直されるの

でなければならぬ。そのような仕事は容易なものではない。たとえ一度体系化がなされたとしても、再び修正を試みる必要も起こることであろう。そうかと言って、誰かによって組み立てられて見られるのでなければならぬ。ここに敢えて、トマス福音書の思想体系の試案的な解釈をなし、諸先生方の助言を仰ぎたいと考えた次第である。

説明の便宜上、私はトマス福音書の思想体系を五つに区分して解釈することにした。すなわちそれは次の五項目にされることになる。イ、内なる母としての聖霊。ロ、内なる父としての真知ハ、生けるものの子としての自己。ニ、理想としての安息と現実的な安息。ホ、光の中に住むナザレのイエス。

イ、内なる母としての聖霊。(基本的属性と派生的属性の分析)。

ナザレのイエスは我われと同じ一人の人間であつたと判断される。少なくとも彼が神であるとされる前に、人間イエスとして研究されることが出来るであろう。トマス福音書によると、人間には三つの基本的属性があるものと考えられている。それは靈性と心魂と身体とである。身体は靈に対する肉とも理解されている。心魂とはギリシャ語のプシケの訳語である。それは靈と肉の間にあるものであって、心とか精神とか和訳することも可能であろう。靈性は尊ばれて富貴のものとなされ、身体は卑しめられて貧困のものとなされている。そこで次のような記述がなされている。訓言二九。イエスが言った。「靈性のために肉が存するのだとす

ると、それは不思議なことである。けれども、もしも身体のために靈性が存するのだとすると、それは不思議中の不思議である。

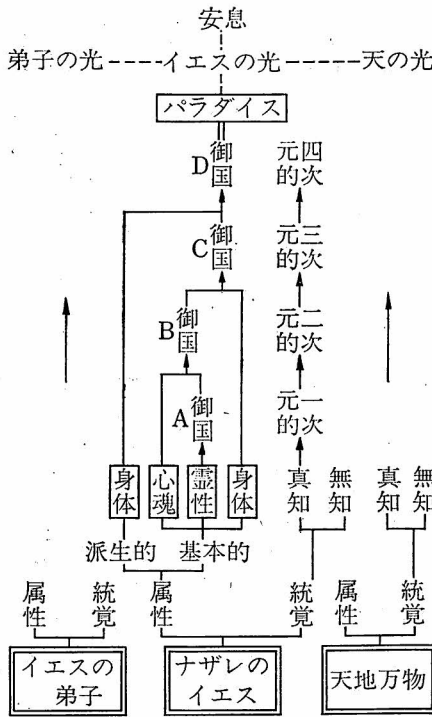
どうしてこの偉大な富貴が、この貧困の中に住居を取ったのか、本当に私は驚ろかざるを得ない。」⁽¹²⁾ 制度的キリスト教では、聖靈は人間の属性とは見ない。けれどもトマス福音書では人間の内部にそれを見出している。そして洗礼ではなく、靈性の割礼を提唱し次のように説いている。訓言五三。彼の弟子たちが彼に言った。「割礼は為になるであろうか。」彼が彼等に言った。「もしも割礼が為になるものならば、彼等の父は既に割礼されたものとして子供たちを彼等の母から産ませたことであろう。それよりもむしろ、靈性における割礼こそが、完全に利益なものになってい⁽¹³⁾る。」ユダ・トマスは靈性や聖靈を母としている。少なくとも人間の心の中に存在する生の付与者と見ている。たとえば次の場合の如くである。訓言一〇一。イエスは言った。「私のようにその父と母を憎まないものは、私の弟子になることが出来ない。また私のようにその父と母を愛さないものも、私の弟子になることが出来ない。何となれば、私の母は私に虚偽を与えてくれたけれど、私の眞の母は、私に命を与えてくれた。」⁽¹⁴⁾

基本的属性として靈性・心魂・身体の三つがある他に、派生的属性の存在も考慮せられている。それは次の語句のあることによつて理解される。訓言八七。イエスは言った。「ある身体に依存しているこの身体は禍である。その双方の身体に依存している魂

もまた禍である。」⁽¹⁵⁾ 魂とは心魂のことである。この身体とは自分の身体であると判断される。そうしてある身体とは自分以外の身体のことと見られよう。それはトマス福音書以外のグノーシスト文献では、物質とも呼ばれているのである。

口、内なる父としての真知。(属性間の優先順位を撰別するグノーシス)。

自己は四つの属性を持つばかりでなく、それらの属性に秩序を与えるために統覚を持つのである。トマス福音書には書かれていないが、この統覚は生けるものと死せるものから成っていると見える。生ける統覚が生き甲斐を作り出し、死せる統覚が生き甲斐の無さを作り出すものであるのは当然である。前者は真知であり、グノーシスである。グノーシスがソクラテースの「汝自らを知れ」(グノーシ・セアウトン)の誠めのもと共通の語であることは言うまでもない。そして後者は無知であるとせられている。真知に立つ人は無理をしない。グノーシスを持つ人は人間の本来性に従つて行動する。眞実の知者は靈性を一義的に重んじて生きるであろう。すなわち靈性を一義的に重視し、心魂や身体は二義的・三義的にしか大切にしないであろう。これに対して無知な人は靈性を重んじない。心魂も二義的・三義的にしか重んじないであろう。グノーシスを欠く愚者は身体や物質を一義的に求めるのが普通だからである。図表は真知によるとどのように属性に順位付けがなされるかを示そうとしているものである。靈性を先ず



重んずる一次元的真知は、御国Aを実現することになる。二次元的真知は靈性の他に心魂も重んずる。そして御国Bを実現することになる。真知が三次元的段階に達すると、身体をも無視しないことになる。また真知が四次元的段階にまで至ると、自己の安息だけでなく、自己を取巻く他者の安息も求めることになる。それは御国Dを具現する境地である。それは自己の安息と他者の安息と全体の安息とを調和させる境地である。それはパラダイスの境地であって、トマス福音書に左の如き楽園風景が記されている。

訓言一九。イエスは言った。「自分が存在するに至った以前に存

在していた自分こそは幸福である。もしもあなた方が私の弟子になり、私の言葉に耳を傾けるならば、これらの石までもあなた方に従うであろう。何となれば、あなた方のためにパラダイスの中に五本の木があるからである。これ等の木は夏にも冬にも煩わされることなく、その葉も落ちない。これ等の木と親しんでいるものは死を経験しないであろう。⁽¹⁶⁾それは偶然の一致であろうが、五本の木がたまたま靈性・心魂・二つの身体・真知に相応しているのである。

靈性が母とか真の母とされるのであるならば、それに対応する父があつて当然である。トマス福音書に次の語が見られる。

訓言五〇。「もしも人たちが、あなた方の中のあなた方の父の印は何かと言うならば、印は運動および安息であると彼等に言いなさい。⁽¹⁷⁾我われの中の父の印^(印)が父による運動と安息であるとは、どういう意味なのであるか。外的には天地の父の意味であろう。しかしながら内的には我われの心の中の活動であると見られるのではあるまいか。もしもそのような解釈が有り得るとすれば、父とはグノーシスであるということになる。グノーシスを内なる父と考えて好いということになる。トマス福音書に次の文章も綴られている。訓言六九。イエスは言った。「自分自身の中で迫害されている人たちは幸である。彼等こそは真に父を知るに至ったのである。⁽¹⁸⁾」この文章は暗に父がグノーシスであることを語っている。

るようである。

ハ、生けるものの子としての自己。(父の子である前に母の子である。)

イエスが生けるものの子 (son of the living one) であることが述べられている。訓言三七。彼の弟子たちが言った。「いつあなたは私たちに現われ、いつ私たちはあなたを見るであろうか。」イエスは言った。「恥かしいと考えないであなたの衣服をあなたに脱ぐならば、そして小さい子供のようにその衣服を足の下に踏み付けてその上を歩くならば、その時にあなたは生けるものの子を見るであろう。そして恐れることがないであろう。」⁽¹⁹⁾ イエスが父の子であることが制度的教会の唯一の考え方である。けれどもユダ・トマスは却ってイエスを母の子と見ることを期待しているのである。何となれば生けるものは聖霊であって、イエスが父の子であることよりも、母の子であることの方を重視する必要があるからである。生けるものから生まれているものが死を見ないことに關して次のように述べられている。訓言一一。イエスは言った。「天も地もあなたの方の面前において巻き上げられるであろう。そして生ける者から生まれているものは、死を見ないであろう。」イエスが言ったではないか。「誰でも自分自身を見出したものは、この世に勝っているのである。」⁽²⁰⁾ イエスばかりでなく、光の人は誰でも、内なる父の子であるとともに内なる母の子でもある。そして内なる母の子であることに本来的な意味が見出

せるのである。

二、理想としての安息と現実的な安息。(イエスの光を中心とした弟子の光と天の光。)

ユダ・トマスの宗教思想においては、御国の概念と光の概念が非常に重視せられている。御国の概念と光の概念とは、どのような関係を持つものであろうか。前者は基礎概念であり後者は上部概念であると言えよう。すなわち前者が現実の境地であり後者が理想の境地である。換言すれば御国は安息の現実化されたものであり光は安息の理想である。更に換言すれば共に安息の境地であって、一方が御国と呼ばれ他方が光と呼ばれるのである。

イエスの理想は光である。それは言うまでもなく安息の理想である。イエスは弟子に対して自から安息を感じようとする。弟子に安息を与える前に弟子に対して安息を感じようとして行動するのである。次にイエスは天地に対し天の父に対しても安息を感じようとする。天地に対して、イエスが安息を感じられるようにすることが、彼の喜びだからである。イエスは天地や外なる父に対して、どのような見方を持っていたかが、次に示す文章において理解されるであろう。訓言六一。イエスは言った。「二人のものが寝台の上に休むであろう。一人は死に他の一人は生きているであろう。」サロメは言った。「あなたは一体だれなのか。一つのものから現われたかの如くに、あなたは私の長椅子に乗り私の食卓で食事をとった。」イエスは言った。「私は分かれることがないもの

(undivided) から現われている存在である。私には私の父が持つ若干の何物かが与えられている。サロメは言った。「私はあなたの弟子である。」イエスは彼女に言った。「それだから私は言うのである。もしも彼が分かれることがないならば、彼は光で満たされるであろう。しかしながらも彼が分かれるならば、彼は闇に満たされるであろう。」⁽²²⁾

木、光の中に住むナザレのイエス。(彼はすべてのものを支配するであろう。)

トマス福音書は左のように記している。訓言二四。彼の弟子たちが彼に言った。「あなたが存在している場所を教えなさい。その場所を尋ねることが私たちに必要なことから。」彼は彼等に言った。「耳を持っているものには、誰にでも聞かせなさい。光の人の内 (within a man of light) に光が存在する。光の人は全世界を照らす。もしも彼が輝やかないならば、彼は闇である。」⁽²³⁾ イエスは自分の住んでいる場所を直接的には答えていない。訓言一一に次のような語が出てくる。すなわち、「もしもあなたが光の中に住むならば、あなたは何をするであろうか。」⁽²³⁾である。両方の言葉を総合して考察するとイエスは光を住居としたものであることが推定されるのである。光に住むものはすべてのものを支配するであろう。かくてユダ・トマスは次のようにその宗教思想を展開して行くのである。訓言二。イエスは言った。「探究するものに彼が発見するまで探究することを続けさせなさい。彼は発見

した場合、困惑することであろう。困惑を感じると次に驚きを感じるであろう。そして遂にすべてのもの (the all) を支配するに至るであろう。」⁽²⁴⁾ 訓言七七。イエスは言った。「それらの総てのものの上にある光こそが私である。私こそがすべてのものである。すべてのものが私から出され、すべてのものが私に向かつて上げられている。一つの木片を割ると私がある。石を引上げると、あなたはそこに私を見出すであろう。」⁽²⁵⁾ もしも光の語を安息の理想の意味にとると、天の光とイエスの光による双子の境地も、ある程度まで理解されるのではあるまいか。

三、共観福音書による思想との比較

マタイ伝に従うと、洗礼者ヨハネもイエスも共に「御国が近づいた」ことを説いていることを記している。すなわち前者については「そのころ、バプテスマのヨハネが現われ、ユダヤの荒野で教えを宣べて、言った。悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。」⁽²⁶⁾とある。そして後者については、「この時からイエスは宣教を開始して、言われた。悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。」⁽²⁷⁾とある。同じ言葉が用いられたにしても、その意味は、全然異なっていたものと思われる。ヨハネは、恐らく世の終りが近づき神の審判が始まることを強調したのでであろう。そしてイエスは、それよりもむしろ、心の中の御国が近づけられていることを強調しようとしたものと考えられる。何となればユダ・トマスの

言葉に従うと次のように御国が既に来ていることが説かれてい
からである。訓言一一三。彼の弟子たちが彼に言った。「いつ御
国が来るのでしょうか。」イエスは言った。「待つていても御国は
来ないであろう。それはここにあるとか彼方にあるとか言われる
べきものではない。むしろ父の御国は地上に拡げられているので
ある。そして人たちがそれを見ないのである。」⁽²⁸⁾ イエスは善が普
及されることを心から希望した。善が世人に行なわれるためには
神の審判も否定しなかつたであろう。けれども世の終りが信じら
れないような人たちにも善が進んで行なえる道があることを発見
した。それは安息を楽しむとするようなグノーシス主義の信奉者
の養成にある。イエスはペテロ・パウロのような行き方も必要で
あるとしたことであろう。しかしながらユダ・トマスのような行
き方を忘れてはならないものと確信していたのであろう。次の文
章がこの間の事情を暗示しているようである。訓言四六。イエス
は言った。「アダムから洗礼者ヨハネまでの間において、女から
生まれたものの中で、洗礼者ヨハネに対して目を低く下げないで
も好いほどの勝れた人物は、出現していない。けれども私は言っ
て来た。誰でもあなたの方の中で子供になれるものが出るなら、そ
の人は御国に親しめ、そしてヨハネよりも勝れたものになるであ
らうと。」⁽²⁹⁾ 終りに当たり、トマス福音書と共観福音書思想で著
しく異なっている点を二つばかり考察することにしよう。

イ、安息の理想を提唱するトマスの福音書。

ペテロやパウロの立場は、神の審判や世の終りを一義的に問題
にするものである。そこで報いとか死後の利益が重要視される。
いわば、それは主意主義に立脚した思想である。これに対してユ
ダ・トマスの立場は主情主義的なものである。死後の賞罰はもち
ろん利益をも軽視する。そして生き甲斐とか安息とかが一義的な
課題にされる。共観福音書にも、安息を説いている場合がないで
はない。それはしかしながら一箇所だけに止まっている。すなわ
ちマタイ伝の次の語がそれである。「すべて疲れた人、重荷を負
っている人は、わたしのところ来なさい。わたしがあなた方を
休ませてあげます。わたしは心優しく、へりくだっているから、
あなた方もわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そ
うすればたましいに安らぎが来ます。」⁽³⁰⁾ これに反してトマス福音
書では安息が何度も何度も説かれているのである。

ロ、男性的性格を尊重する共観福音書。

霊性とか霊を現わすセム語は、言語学的に女性名詞とせられて
いる。そこで聖書外典の中には聖霊をイエスの母と述べているも
のさえもある。いずれにしてもトマス福音書では左の如く聖霊が
父や子よりも上位な存在として説かれている。訓言四四。イエス
は言った。「父に対して汚すことをした人は誰でも赦される。子
に対して汚すことをした人も赦される。けれども聖霊に対して汚
すことをしたものは、地においても天においても、誰も赦されな
い。」⁽³¹⁾ これは安息というような女性的性格を一義的に尊ぶトマス

福音書の当然の主張であると考えられる。

聖霊を汚す罪については共観福音書では、マルコ伝にもルカ伝にもマタイ伝にも出ている。マルコ伝のそれは次のようになってゐる。「*κτίζετε, οτι οταν τα εσθητα των ανων αυτων φορεσητε, οταν τα εσθητα των ανων αυτων φορεσητε, οταν τα εσθητα των ανων αυτων φορεσητε*」。「また神をけがすことを言つても、それはみな赦していただけます。しかし聖霊をけがすものはだれでも、永遠に赦されず、とこしえの罪に定められます。」⁽³²⁾聖霊はラテン語では男性でありギリシヤ語では中性である。そこで多分、聖霊は女性とはされなくなったのであろう。そして神が男性的性格のものであるとされ、聖霊も男性化されて行つたのであろう。それにしても、なぜ聖霊の方が神よりも尊重されているのかという別の問題が残るものと言えよう。

- (1) James M. Robinson ed. THE NAG HAMMADI LIBRARY (The Gospel of Thomas) 1981. p. 118
- (2) 聖書外典偽典第七卷『新約聖書外典Ⅱ』教文館 一九七六年(トマス行伝第四行伝 三九—二六六ページ)
- (3) THE NAG HAMMADI LIBRARY (The Gospel of Thomas) 1981, p. 129
- (4) 聖書(新改訳) 日本聖書刊行会 昭和五五年 ルカ 九章六〇節—二二二ページ
- (5) 聖書 マタイ 八章 二二節—二三ページ
- (6) 聖書 ルカ 一七章 二二節—二三ページ
- (7) THE NAG HAMMADI LIBRARY (The Gospel of Thomas) p. 118

- (8) Ibid. p. 126
 - (9) Ibid. p. 120
 - (10) Ibid. p. 124
 - (11) Ibid. p. 118
 - (12) Ibid. p. 121
 - (13) Ibid. p. 124
 - (14) Ibid. p. 128
 - (15) Ibid. p. 127
 - (16) Ibid. p. 120
 - (17) Ibid. p. 123
 - (18) Ibid. p. 126
 - (19) Ibid. p. 122
 - (20) Ibid. p. 129
 - (21) Ibid. p. 124—125
 - (22) Ibid. p. 121
 - (23) Ibid. p. 121
 - (24) Ibid. p. 118
 - (25) Ibid. p. 126
 - (26) 聖書 マタイ 三章 一—二節—三ページ
 - (27) 聖書 マタイ 四章 一七節
 - (28) Ibid. p. 129—130
 - (29) Ibid. 123
 - (30) 聖書 マタイ 一一章 二八—三〇節
 - (31) Ibid. p. 123
 - (32) 聖書 マルコ 三章 二八—二九節
- (じゅしゃ・よししげ、経営倫理、愛知学院大学教授)